

歯科衛生士症例ポスター

(ポスター会場)

5月21日（土）	ポスター掲示	8：30～10：00
	ポスター展示・閲覧	10：00～17：00
	ポスター討論	17：00～17：50
	ポスター撤去	17：50～18：20

ポスター会場
HP-1～9



ベストハイジニスト賞授賞 (第58回秋季学術大会)

DHP-02 石原 彰子

DHP-02

2504

歯周基本治療により改善した広汎型重度慢性歯周炎患者の一症例

石原 彰子

キーワード：セルフケア，患者教育，重度慢性歯周炎

【はじめに】重度慢性歯周炎の患者に対して，生活背景を問診し患者に気づきを与え，セルフケアの向上に繋げ，歯周基本治療のみで良好な結果が得られた。さらに，その家族の治療も行った症例を報告する。

【初診】2010年1月，患者：39歳女性。主訴：右側上顎臼歯部咬合痛。喫煙歴：20～37歳。

【診査・検査所見】全顎的に歯肉の退縮，発赤腫脹を認めた。BOP:92.2%，PPD:7mm以上:41.9%。数歯には排膿がみられ，多数歯の動揺および反対咬合，歯列不正を認めた。全顎的に重度の水平性骨吸収があり，臼歯部には一部垂直性骨吸収を認めた。

【診断】広汎型重度慢性歯周炎

【治療計画】1.歯周基本治療 2.再評価 3.歯周外科治療 4.口腔機能回復治療 5.再評価 6.SPT

【治療経過】患者教育とTBIを繰り返し行い，スケーリング・ルートプレーニングを行った。セルフケアが向上し歯肉の炎症が消退，歯周ポケットが改善し，レントゲンにおいて歯槽硬線の明瞭化を認めたため，歯周外科治療は行わず，2012年8月SPTに移行した。咬合性外傷に対して，咬合調整と夜間のナイトガード装着を継続している。

【考察・まとめ】患者は，当初，歯科に不信感をもち治療に消極的であった。コミュニケーションをはかり，今までの生活を振り返りながら歯周病が進行してしまった原因を一緒に考えることで，行動変容に繋がりをセルフケアが向上していった。父母弟も慢性歯周炎であり，家族内感染の可能性と生活環境の類似が影響していると考え。今後，歯肉縁上縁下のプラークコントロールや咬合性外傷の確認を行い，加齢に伴う心身の変化にも注意しながらSPTを継続していくことが重要と考える。

HP-1

2199

妊娠と歯周病に関するアンケート結果から考察する
歯科衛生士の役割

満 望美

キーワード：妊婦、歯周病、アンケート

【はじめに】日頃から若い年齢の患者に妊娠と歯周病の関連性を説明しているが、認知度はまだまだ低いと感じざるを得ない。今回、妊娠と歯周病に関する認知度の現状を把握するためのアンケート調査を実施し、その結果から歯科衛生士として果たすべき役割について考察したい。

【材料および方法】平成27年5月23日～9月30日に、鹿児島市内の当院、助産院、産婦人科病院および始良市の小児歯科を含む4カ所を対象に、妊婦と経産婦500名へアンケート調査を行った。

【結果】「妊娠性歯肉炎を知っている」は約半数の54%という結果だった。時期は「妊娠してから知った」が68%で、「保健所や産婦人科で知った」が59%、「歯科医院で知った」はわずか17%だった。妊娠中に困った口腔内症状として「歯肉腫脹や出血」が最も多かったが、妊娠中に歯科を受診しても70%が中断し、体調不良が最も多い理由であった。また「歯科医院での歯周病検査や説明」「ブラッシング指導」経験も共に30%台と低かった。

【考察・まとめ】妊娠と歯周病の関わりについて、歯周病治療に携わる我々の認識と現状にはまだ大きな差がある事が分かった。齲蝕治療に比べ、未だに歯周病ケアが多く、歯科医院でのルーティンワークになっていないのではないだろうか？また妊娠後に啓蒙を行なっても、実際は口腔内に症状を自覚するも歯科医院に通院することが難しいため、妊娠前から認知してもらい口腔ケアを定着させる必要性を再認識した。若い世代から歯周病と全身の関連性についてしっかりと伝えていくために、各分野と連携を図り、歯科衛生士としてできることを行っていきたい。

HP-3

3001

広島大学病院でのHIV感染患者の歯科診療支援における
歯科衛生士の取り組み

岡田 美穂

【背景】HIV感染者の歯科治療は、抗レトロウイルス療法によって、カポジ肉腫、HIV関連歯周疾患のようなHIV・AIDS関連の口腔症状の治療から一般歯科治療に変化し、患者はライフスタイルに合わせた地域歯科医院の受診を望んでいる。しかしながら、HIV感染者の歯科診療支援体制は未だ十分に整えられていない。本院では、広島県歯科医師会と連携しHIV歯科診療体制構築事業を行うとともに、歯科衛生士が中心となり、HIV感染患者の歯科治療を支援している。そこで、本院の歯科衛生士による歯科診療支援活動を報告する。

【活動内容】1. 多職種連携：HIV医療は、医師、臨床心理士などの多職種連携で成立する。情報共有のために、血液内科の症例検討会や他職種の研修会に参加している。2. 外来歯科診療支援：患者の口腔状態に対する不安や問題点を把握し、口腔衛生管理の重要性について情報を提供するために、血液内科外来において歯科衛生士面談を実施している。その内容を歯科医師、血液内科医師、看護師に報告し、歯科治療が必要な場合は、本院歯科あるいは「広島県HIV歯科診療ネットワーク」を通じて地域の歯科医院へ紹介している。3. 入院時の歯科診療支援：血液内科医師から担当歯科医師に院内紹介し、専門的口腔ケアを必要と判断した場合には、歯科衛生士による口腔衛生管理を行っている。

【結果・まとめ】歯科衛生士が積極的に多職種と連携し、治療初期から患者と接することによって信頼関係を構築し、患者の多様なニーズに対応することが可能となった。今後は、服用抗HIV薬と口腔環境・味覚機能との関連を調べ、患者ごとの最適な歯科診療支援法を確立していきたい。

HP-2

3001

セルフケアで使用してもらう清掃用具の比較

定松 みなこ

【目的】GCペリオブラシ（2T）、他社のワンタフトブラシを使い、歯肉に炎症がある患者に対してのPCR・BOPの変化について比較し、2Tに対しての使用感を評価することを目的とした。

【材料】・GCルシェロペリオブラシ（2T）・他社のワンタフトブラシ
【方法】当院に来院している、軽～中等度の慢性性歯周炎でメンテナンスに移行している患者、12名を対象（内1名は全身疾患のため来院不可となった。）に全数調査を行い、2Tを2ヶ月間、ワンタフトブラシを2ヶ月間の計4ヶ月間にわたって、PCR・BOPを計り、最後に使用感アンケートを選択回答で行った。

【結果と考察】今回の調査で、2T・ワンタフトブラシを使うことによって、全体的にPCR・BOPとも下がり、患者自身のブラッシングにたいするモチベーション、ブラッシングスキルも向上した。使用感アンケートでは、持ちやすさ・毛束の質感という項目では今回は2Tの方が高評価だった。2Tに関しては、ブラークの除去というよりもマッサージ感覚で使っているという答えが多かった。これからは患者の様々な症状に合わせて、ポイントブラシを選んでいき、患者の年齢・性別・癖・生活習慣に目を向けそれぞれのライフスタイルに合わせた清掃用具を勧めていく必要がある。

HP-4

2402

先天性ネフローゼ症候群患者の薬物性歯肉増殖症への
対応

梶谷 明子

キーワード：薬物性歯肉増殖症、生体腎移植、ブラークコントロール
【はじめに】幼少期に生体腎移植を受けた先天性ネフローゼ症患者に発症した薬物性歯肉増殖症に対する治療経過を報告する。

【患者】初診：2012年11月。患者：22歳、男性。身長140 cm、体重35kg。既往歴：先天性ネフローゼ症候群（9歳時に生体腎移植、18歳で腎不全）、高血圧症。主な内服薬：タクロリムス、プレドニゾロン、Ca拮抗薬。その他：受診時に母親が常に同伴。

【口腔内所見】全顎的に著しい線維性歯肉腫脹（肥厚）のため口腔衛生管理は不良で、歯間部には歯石が多量に沈着していた。

【診断】薬物性歯肉増殖症

【治療方針】①患者および母親への治療説明と同意取得、②歯周基本治療（モチベーションの維持、口腔衛生指導、SRP）、③歯周外科治療（歯肉切除術）、④SPT

【治療経過】初期に内科主治医にCa拮抗薬の変更を求めようとしたが、母親の強い希望で薬剤変更は叶わなかった。徹底した口腔衛生指導によってブラークコントロールは改善した。しかし、著しい増殖歯肉のためにセルフコントロールには限界があった。そこで、管理し易い歯肉形態の獲得を目的に歯肉切除を行い、月に一度の専門的口腔衛生管理を徹底した。しかし、薬剤の影響によって歯肉は再度増殖傾向であった。2015年9月からCa拮抗薬が変更となったことで、再増殖傾向にあった歯肉増殖は消退し、現在は良好な歯肉形態を維持できている。

【考察】本症例は最終的にCa拮抗薬の変更によって薬物性歯肉増殖を改善できた。先天性疾患を有する患者において、全身状態が安定した状態での服薬変更は本人や家族にとって大きな心理的負担となることを痛感した。患者と家族の背景に寄り添う治療の重要性を再認識した。

HP-5

2904

Full mouth disinfection後に行動変容とQOLの向上を認めた自閉性スペクトラム症患者の一症例

吉岡 真由美

キーワード：自閉性スペクトラム症, full mouth disinfection, 行動変容

【はじめに】歯科場面で他害や拒否などの不適応行動がみられた自閉性スペクトラム症患者に対して、歯周治療を行なったことで行動変容や生活面の変化が認められた症例について報告する。

【初診】患者：44歳女性。初診日：2011年3月31日。主訴（母親）：歯ぐきが腫れている。既往歴：15歳時にてんかん発症。服用薬：フェニトイン、他5種。生活状況：21歳より施設入所し毎週末帰宅。口腔既往歴：15歳から地区の歯科に定期的に通院し、う蝕治療、スケーリング、PMTCを行っていたが、歯周病の進行を指摘され当センター来院。初診時、椅子を投げげる、絶叫、体動などの不適応行動がみられた。

【診査・検査所見】全顎的に歯肉乳頭部および辺縁歯肉の発赤・腫脹を認める。PCR：100%、BOP：85.8%、PPD：平均5.2mm、4～6mm 66.7%、7mm以上20.4%。

【診断】広汎型重度慢性歯周炎

【治療計画】1歯周基本治療 1) 母親と施設職員に対してTBI 2) 歯肉縁上スケーリング 3) 全身麻酔下でのfull mouth disinfection(FMD) 2再評価 3SPT

【治療経過】FMD後は歯周組織は良好に改善し、それに伴い介助者による歯磨きと歯科治療に対する協力性の向上が認められた。また、食生活では咀嚼可能な食材が増え、食の幅が広がった。2012年10月から毎月のSPTに移行した。

【考察・まとめ】自閉性スペクトラム症患者に対するFMDは治療効果が高く、その波及効果として行動変容やQOLの向上につながる事が示唆された。

HP-7

2504

全身疾患を伴う重度慢性広汎型歯周炎の症例～患者さんと共に歯肉の変化を観察する～

上田 順子

キーワード：歯肉増殖、慢性骨髄性白血病、慢性腎炎、

【はじめに】本症例の患者はH19年（2008年）に慢性骨髄性白血病を発症、歯周基本治療中に慢性腎炎を発症された。更に高血圧症の既往もある。初診時、何もしなくても口腔内から出血している状態が心配で来院された。全身的な状態を考慮しながら、患者と共に歩んできた歯周治療の経過を報告する。

【初診】初診：2013年11月8日（61歳・男性）、主訴：17番歯肉、歯肉からの出血、現病歴：高血圧症、慢性骨髄性白血病、慢性腎炎

【診査・検査所見】口腔内所見：初診時PCR100%、BOP81.0%、4mm以上PPD76.4%、X線所見：全顎的に顕著な歯槽骨の吸収が認められる。

【診断】重度慢性広汎型歯周炎

【治療計画】1) 第一主訴の解決 2) TBI・生活習慣の改善 3) 歯周基本治療4) 再発予防の3DS (Dental Drug Delivery System) 5) SPT

【治療経過】1) 2013.12月～歯周基本治療 2) 2014.7月再評価、3) 2015.4～補綴物改善 4) SPT

【考察・まとめ】慢性骨髄性白血病は将来的には急性期白血病を発症するリスクがあり慎重に対応する必要がある。初診時の歯肉の状態が降圧剤による強い歯肉増殖を伴う炎症であったため、炎症の軽減にはかなりの時間を要した。患者さんと共に改善していく歯肉を観察する過程で、歯肉の変化のみならず心理的な変化も確認できた。基本治療を進める中徐々に健康観に目覚め自助努力を徹底され、良好な口腔内を維持している。今後は再発予防を視野にSPTの継続させていくことが課題である。

HP-6

2504

歯周治療におけるモチベーションの重要性

上領 梨華

キーワード：モチベーション、ブラークコントロール

【はじめに】歯周治療を行っていくうえで重要なブラークコントロールを通して患者が歯肉の変化を体験し、その事実がモチベーションへと繋がり、患者との信頼関係がうまれ、口腔清掃状態、歯肉の炎症が改善された一症例を報告する。

【初診】患者：64歳女性 初診日：2014年7月18日 主訴：左下臼歯部の脱落 既往歴：なし 喫煙経験：なし 現病歴：36の脱落、歯肉からの出血、歯の動揺

【診査・検査所見】全顎的に歯肉の発赤、歯頸部に多量のブラーク付着を認めた。上顎にはPDが入っており、PDの清掃状態も不良。4mm以上のポケット29%、BOP46%である。上顎前歯部は7mm以上のポケットを有し、動揺度3である。

【診断】中等度一部重度慢性歯周炎

【治療計画】1) 36の残根抜歯 2) 歯周基本治療：ブラークコントロール、SRP 3) 再評価 4) 口腔機能回復処置：補綴治療 5) 再評価 6) メインテナンス

【治療経過】ブラークコントロールを行いながら、36の残根抜歯、47病的歯牙移動のため抜歯を行った。炎症が改善されSRPへ移行。SRP後7mm以上のポケットを有していた13、12、22を抜歯し再評価。骨のレベリングをし、上下顎にPD。再評価を行いメインテナンスへ移行。

【考察・まとめ】ブラークコントロールを行っていくうちに、患者から出血がなくなった、ここはどう磨いたら良いかなどといった言葉が出てきた。この言葉から患者の治療に対するモチベーションが向上してきたと読み取れた。今後メインテナンスを行っていくうえで治療当初ほどのモチベーションが維持できるとは限らないため、モチベーションが下がってきている患者をいかに再び向上させるかが重要である。

HP-8

2402

医科歯科連携診療により歯周組織の改善と自己効力感の向上が認められた糖尿病関連性歯肉炎症例

上村 祐可

キーワード：歯周基本治療、1型糖尿病、医科歯科連携

【はじめに】1型糖尿病を有する糖尿病関連性歯肉炎症患者に対して積極的な歯周治療とセルフケアを重視した患者教育を行い医科歯科連携により歯周組織の改善および自己効力感の向上が認められた症例を報告する。

【初診】25歳男性。初診日2009年6月19日。主訴：歯周病なのか気になる。歯石を取りたい。全身既往歴：1型糖尿病（18歳で発症HbA1c7.9%糖尿病専門医受診中）、偏頭痛、逆流性食道炎、十二指腸潰瘍、うつ病。口腔既往歴：2005年頃に某歯科医院でう蝕処置を行った後、未受診。

【診査・検査所見】全顎的に著しい歯肉の発赤・腫脹、多量の歯肉縁上・縁下歯石の沈着を認める。PCR87.9%、4mm以上のPD19.5%、BOP73.3%

【診断】糖尿病関連性歯肉炎

【治療計画】①歯周基本治療②再評価③SPT

【治療経過】①歯周基本治療（モチベーション、口腔清掃指導、SC、SRP、食事指導支援）②再評価③SPT（SPT5年目PCR39.7%、4mm以上のPD5.2%、BOP4.2%）

【考察・まとめ】医科歯科連携による適切な情報提供が積極的な治療とモチベーションの維持に繋がって日常生活習慣の改善に繋がった。初診時はPCR値が高く、歯についている沈着物歯石であると認識していなかったが現在は規則正しい口腔清掃習慣も身に付き、起床時の口腔内の粘着感の改善を自覚するようになった。体調管理状況によってブラークコントロールが不安定となるため1カ月毎のSPTを実施している。様々な事に意欲が出てきて糖尿病食事療法ではカーボカウントに興味を持ち、糖尿病専門医へ相談し夕食のみ開始。1型糖尿病の治療経過はHbA1c7.9%→7.0%と改善が認められる。今後も医科歯科連携の下で患者の口腔を通し全身の健康改善と維持管理の支援を行ってきたい。

キーワード：尋常性天疱瘡，口腔衛生指導，医科歯科連携

【症例概要】天疱瘡は皮膚・粘膜に上皮（表皮）内水疱を形成する自己免疫性水疱性疾患の一つで，高頻度の病型に尋常性天疱瘡がある。今回，尋常性天疱瘡に起因する剥離性歯肉病変の患者に対し，医科歯科連携で治療を行い，サポータティブペリオドンタルセラピー（SPT）まで移行したので報告する。

患者：41歳，女性

初診：2014年3月

主訴：歯肉上皮剥離による接触，食事，嚥下時の疼痛

現病歴：歯肉発赤と歯肉上皮剥離を認め，近医を受診。精査・治療を目的に当院を紹介。

現症：接触痛の影響で口腔清掃困難となりブラークコントロールレコード（PCR）76.9%。歯肉辺縁の発赤，歯肉上皮剥離と偽膜様組織の形成を認めた。難治性の歯肉病変により精神的不安。

診断：尋常性天疱瘡による非ブラーク性歯肉病変

【治療方針】

1. 接触痛に関連した口腔清掃困難に対し口腔衛生指導，専門的口腔ケア
2. 疾患に関連した精神的不安に対し傾聴，受容，共感
3. 食生活に関連した病変増悪に対し食生活指導

【治療経過】医科入院中に副腎皮質ステロイドの投与による治療が開始。歯科では口腔衛生指導，専門的口腔ケア，難治性の病変や治療に対し不安があった為，傾聴，受容，共感し精神面の支援及び食生活指導を行った。現在はPCR20%台を維持し剥離性歯肉病変も改善。現在SPTで管理を行っている。

【考察・結論】本症例は医科歯科連携の中で確定診断が得られ口腔衛生指導，口腔清掃困難部位を中心に専門的口腔ケア，精神的支援及び食生活指導を行ったことで，疼痛緩和や剥離性歯肉病変悪化の防止そして精神的不安が軽減した考えられる。難治性の歯肉病変では医科歯科連携を図り適切な支援をすることが大切であると考ええる。

